

2013年10月11日 発行

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

どなたでもいつの会でも参加できます

9月の「森三郎の作品を読む会」では、
「ちゑの小法師」(「赤い鳥」昭和7年7月号初出
森三郎童話選集「かささぎ物語」所収)
「坂本龍馬」(「赤い鳥」昭和7年7月号初出)
を読みました。

「ちゑの小法師」は「むかし三河に小垣江といふ、海ぞひの小村がありました。」という文から始まっている。舞台設定としてこの地域の地名が出てくるのは四作目である。

昭和6年12月号「かささぎ物語」(三河の高濱といふさびしい港町)
昭和7年3月号「目ぐすり」(三河の刈谷といふ小さな城下町)
昭和7年4月号「竹馬與市」(三河の依網といふ濱ぞひの小村)

これらの作品に共通することがもう一点ある。作中に歌がふんだんに出てきて、場面転換やテーマの示唆になっているという点である。「ちゑの小法師」でも、初めは

「げんげ山からお寺を見ればの、

お寺さびしや、小ぞうひとりやの」

と、おばあさんに化けた大狸の強気な歌で話の展開を暗示している。しかし最後は、小僧さんにすっかりやられて

「山の上から笹寺みればの、

小ぞうこはやの、鐘ならすの。」

と意気消沈した狸のかなしそうな声で話が終わっている。

また、作中の子どもたちの歌うわらべ歌

「からす来い。かうもり来い。

屋根の上で、とうふ食はしよ。」

は、「からす来い 餅やろぞ」など、日本のあちこちで同類の歌があったらしい。からすだけでなく、「かうもり来い、ぞうりやろ」など、夕暮れ時の空に飛ぶからすやこうもりを歌うわらべ歌は多いようだ。

そこで思い出すのが、「かささぎ物語」の最後に子どもたちが歌う「一つ星目つけた。長者になあれ。」である。あの歌も、宮澤賢治も引用するように、当時よく歌われていたわらべ歌であった。「ちゑの小法師」中の他の歌が森三郎の創作であったとしても、この歌は刈谷のあたりでも当時歌われていたわらべ歌であった可能性は高いだろう。

「坂本龍馬」は、「多木七郎」の名前で「実話」というジャンルで書かれている。子どもの頃からのエピソードを丹念につないで龍馬の生涯を描いている。そして「龍馬は気の毒にも、その後間もなく完成された維新の御代をも仰ぎ得ずに亡くなったのです。」「をしい人を倒したのです。」と結んでいる。

「森三郎童話選集 かささぎ物語」の解説で、酒井晶代先生は伝記や歴史物などの「人物の選択や資料の収集にあたって兄銚三の助言があったことは間違いない。」と書いている。兄の銚三自身にも雑誌「伝記」昭和十八年一月号に発表された「坂本龍馬」を書いた作品がある(「森銚三著作集続編 第一巻所収」)。赤い鳥に掲載された三郎の「坂本龍馬」より十年ほど後のことになる。

銚三の「坂本龍馬」は、龍馬二十二歳の時の、剣客として名のあつた長州藩の木戸準一郎との大試合にあたってひるむことなく戦い打ち勝ったエピソードを中心に書かれている。そして、龍馬は一生を通じて、恐怖の観念を持たず数々の大きな仕事を為すが、そのような龍馬の人物は二十二歳の頃すでに出来上がっていたともみられると分析している。

一方、三郎は龍馬の「何でも仕事は八九分だけじぶんがして、のこりの一二分は人にやらせて花をもたせてやるものだ。」という言葉から、その「だれからも愛され、・・・したはれてい」た人柄をもって「をしい人を倒したものです。」と言っている。「強さ」をとらえるか、「やさしさ」をとらえるか、兄弟それぞれ文体にもその違いが反映しているような気がして、おもしろい。

次回予定 平成25年11月8日(金) 午後1時〜3時

『赤い鳥』昭和7年8月・9月号初出作品

『シヨセフ・ヒコゾー』(二か月連載)